2027 年投稿・2028 年発行

『保育学研究』第 66 巻の特集論文
テーマ：保育の中のインクルージョン

近年、教育や保育の分野において「インクルージョン」という言葉を目にする機会が増えている。特に特別支援教育の領域では、障害のある子どもとない子どもが同じ場で学び、育つことをめざす理念としてインクルーシブ教育の議論が進められてきた。一方で、保育の場に目を向けると、子どもたちの多様性は必ずしも障害の有無だけによって語り尽くされるものではない。文化的背景や家庭環境、海外につながる家庭で育つ子どもや経済的困難のなかにある家庭の子ども、発達の個人差や言語、さらには子ども一人ひとりの気質や興味関心など、保育の現場にはさまざまな違いをもつ子どもたちが日常的に共に生活している。こうした多様な子どもたちが同じ生活の場を共有しながら育ち合う営みは、保育の実践のなかでこれまでも自然に行われてきた側面をもつと言えるだろう。

インクルージョンという考え方は、本来、特定の子どもを特別に位置づけることよりも、子どもたち一人ひとりの違いを前提としながら、誰もが同じ場の中で共に生活し、学び、育つことができるようにすることを意味している。言い換えれば、それは保育の場において、子どもたちの多様な姿を可能なかぎり包み込み、誰かを取りこぼしてしまうことのない関係や環境をどのようにつくっていくかという問いでもある。また、そこでは包括される側の子どもだけでなく、周囲の子どもたちや保育者を含めた生活集団全体のあり方が問われることになる。

今日、保育の場には、障害のある子どもだけでなく、海外につながる家庭で育つ子どもや経済的困難のなかにある家庭の子どもなど、多様な背景をもつ子どもたちが共に生活している。こうした状況のなかで、保育がどのように子どもたちの違いを受けとめ、共に生活し育ち合う関係を支えていくのかは、あらためて問い直されるべき課題であろう。

そこで本特集では、「保育の中のインクルージョン」という視点から、保育実践の場において多様な子どもたちがどのように共に生活し、育ち合っているのかを改めて考えてみたい。障害児保育や特別支援教育の視点に限らず、日常の保育実践、子ども同士の関係、保育者の援助、環境構成、さらには制度や社会的背景など、さまざまな角度からインクルージョンを捉える研究を広く求めたい。本特集が、保育におけるインクルージョンについての議論を深め、これからの保育を考えるための一つの契機となることを期待している。

（文責　七木田　敦）